

大沼野営場がオープン



今季オープンした大沼野営場
豊かな自然が家族連れに人気

アウトドアスポットとして人気がある鯉沼地区の大沼野営場が4月29日オープンし、町内や近隣から家族連れが訪れてデイキャンプなどを楽しみました。

大沼野営場は、外周約4kmの大沼のほとりにある有料のキャンプ場で、トイレを併設した管理棟や炊事場、簡易トイレなどがあり、貸し出し用のテントもあります。木々に囲まれた豊かな自然が人気を集めています。来訪者は密を避けながら新鮮な空気の下でアウトドアを満喫しました。

その後、新型コロナウイルス感染症が拡大し、北海道が国の緊急事態宣言の対象地域に指定されたことなどにより、現在、町は大沼野営場を町民のみの利用に制限しています。

町は5月6日、苫小牧市出身の松田一仁さん(62歳)に企業研修型地域おこし協力隊の委嘱状を交付しました。

松田さんは、大学を卒業後、大手化粧品メーカーなどに勤務し、現地法人の営業責任者として上海にも駐在していました。日本マーケティング協会マーケティングマスターを取得し、主に商品企画や販売促進、宣伝調査などブランドマーケティングの実績があり、町内での事業開発の話聞いて協力隊に応募しました。

委嘱状を交付した宮坂町長は「ノウハウを生かし、農産品の6次化や域内循環の活性化など、大いに期待しています」と語ると、松田さんは「町の農産物をブランド化し、中国など海外に販路を展開していきたい」と答えました。

企業研修型地域おこし協力隊 松田一仁さんに委嘱状



委嘱状を手に意欲をみせる松田さん



協定を締結した宮坂町長と遠藤代表取締役

ウォレットジャパン株式会社と協定締結

町とウォレットジャパン株式会社(札幌市)は5月10日、「災害時におけるコンテナ型トイレ等の供給に関する協定」を結びました。

同社が、北海道内の自治体と協定を結ぶのは、北海道、北広島市に次いで厚真町が3例目。緊急時などの際には町の要請に基づき、避難所などにコンテナ型水洗トイレを供給します。

同社代表取締役の遠藤吉勝さんは「胆振東部地震の時も協力させていただきました。快適で安全なトイレを提供したい」とあいさつ。宮坂町長は「災害時では、トイレは食料と寝る場所と同等に大切なものです。協定によって十分な衛生環境が保障されることに感謝したい」と語りました。

町では、災害情報や町からのお知らせが放送される「防災行政無線」を無償貸与しています。

「もしものとき」は明日かもしれない

問い合わせ 総務課 防災グループ ☎ 27-2481

防災のページ 土砂災害区域について



近年、日本各地および道内においても、長く降り続く雨、局地的かつ集中的な豪雨による土砂災害が頻発しています。また、平成28年の熊本地震や平成30年胆振東部地震にみられるように地震による土砂災害も多く発生しています。

このようなことから、町は北海道と連携してハード対策はもとより、国の土砂災害防止法に基づき、警戒避難体制の充実・強化などのソフト対策にも取り組んでいます。



警戒避難体制の整備

土砂災害防止法について

土砂災害警戒区域指定法とは

土砂災害防止法は、平成11年の広島市や呉市などで発生した大規模土砂災害を契機として、平成12年5月に制定、平成13年4月に施行されました。

土砂災害(がけ崩れ、土石流、地すべり)から国民の生命・身体を守るために、土砂災害が発生する恐れのある危険区域を明らかにし、「危険の周知」や「警戒体制の整備」、「一定の制限による住宅などの新規立地の抑制」、「危険区域内の住宅移転推進」などのソフト対策(施設整備によらない対策)を推進するものです。

土砂災害警戒区域指定の流れ

北海道が土砂災害危険箇所の地形や土地利用状況などを調査する「基礎調査」を実施します。その後、関係する住民に住民説明会を実施して、土砂災害警戒区域を指定します。

土砂災害警戒区域の種類

土砂災害警戒区域には、土砂災害が発生した時の被害の規模に応じて、「土砂災害警戒区域(イエローゾーン)」と「土砂災害特別警戒区域(レッドゾーン)」の2種類があります。

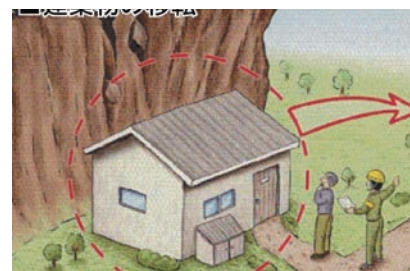
土砂災害警戒区域(イエローゾーン)

土砂災害から生命を守るため警戒避難体制の整備(地域防災計画への記載、要配慮者施設の避難体制、ハザードマップによる周知、宅地建物取引における取引業者の説明義務)を行います。

これにより、住民の防災意識の向上と防災情報の伝達体制を確立し、土砂災害時の避難体制を推進します。

土砂災害特別警戒区域(レッドゾーン)

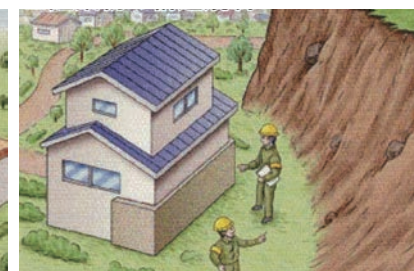
警戒避難体制の整備に加え、「建築物の構造規制」、「特定の開発行為に対する許可制」、「建築物の移転」の処置がとられます。



建築物の移転



特定の開発行為に対する許可制



建築物の構造規制

町内の土砂災害警戒区域等は、令和元年度末に基礎調査が終了しました。関係する住民への説明会を経て、令和2年度末にイエローゾーン194カ所、レッドゾーン100カ所が指定されました。

詳しい場所は、別途配布するパンフレットおよび以下のホームページでご確認ください。



町ホームページ

厚真町地域防災計画 資料編
(25頁～34頁)に記載



北海道土砂災害警戒情報システム

土砂災害警戒区域等の指定状況および基礎調査結果

秋村美代さん 100 歳のお祝い

町は5月17日、満100歳を迎えた秋村美代さん(上厚真)に百寿のお祝いを贈りました。

浜益村出身で、9人兄弟姉妹の3女として生まれ、結婚後は6人の子どもに恵まれました。現在、苫小牧市内の病院で療養し、親類から送られた動画などを見て過ごしているそうです。

お祝いは、秋村さんの4女で紺屋良子さん(67歳)と夫の義雄さん(70歳)が宮坂町長から受け取りました。町長が「一日でも長生きされることを願っています」と話すと、良子さんは「内臓は丈夫なので、元気に過ごして欲しいと思います」とお礼を述べました。



百寿のお祝いを受け取った良子さんと義雄さん



初の全国出品で審査委員会特別賞を受賞した作品と中井さん

習字教室主宰の中井紫竹さん 初の全国入賞、作品を町に寄贈

習字教室を主宰する中井紫竹さん(本名・中井るみ子さん)が5月17日、全国規模の第11回観梅展(公益財団法人日本習字教育財団主催)に初出品して初入賞したことを町に報告しました。

観梅展は2000年にスタートした条幅作品展。昨年夏に作品を募集し、約3000点の中から、道内では最高賞の大賞と審査委員会特別賞に中井さんが選ばれました。

中井さんは、コロナ禍で停滞する空気を書の力で元気にしたいと出品を決意。特別定額給付金で筆や墨などを購入し、自らの心を清める意味がある「洗心」の2文字を書き上げました。たくましさの中にも墨のにじみやかすれで繊細さや躍動感を表現しました。

中井さんは「教室を開いて17年。受賞を励みに、体力が続く限り頑張りたい」と語りました。受賞作品は町に寄贈され、総合福祉センターのロビーに飾られました。

10 年ぶりに人権の花運動 町内 2 小学校の児童が花壇づくり

町は5月18日、上厚真小学校で10年ぶりに人権の花運動を実施しました。

運動は、法務省の委託事業です。全国の小学生が対象で、花を育てることで互いに尊重し、優しさや思いやりの心を養うことを目的にしています。上厚真小学校では、教員から手ほどきを受けた1年生13人が、白やピンク、赤の3色のベゴニアの苗約50株を6個のプランターに植えました。

また、月末には、厚真中央小学校でも、学年ごとに数日かけて全校児童がプランター25個に花の苗200株を植えました。



優しく穴を掘りベゴニアの苗を植える1年生たち

厚真ダムで取水式

町土地改良区(細川隆雄理事長)主催の厚真ダム取水式が5月12日、ダム管理事務所近くの高台にある水神宮で行われ、土地改良区の役員ら約30人が営農用水の安定供給と秋の豊作を祈願しました。

昨秋、胆振東部地震で被災した水神宮の修復が終わり、取水式は2年ぶりに行われました。細川理事長は「皆さんに集まっていただき、取水式ができてうれしく思います。貯水量も順調で、今年も出来秋が楽しみです」と語りました。



営農用水の安定供給などを願う関係者たち

鵠川漁業組合青年部と女性部が植樹

鵠川漁業協同組合厚真支所の青年部と女性部が5月13日、胆振東部地震で斜面が崩落した幌内地区の町有林で植樹を行い、森林の早期再生を願いました。

青年部と女性部の植樹は、2年ぶり15回目で、今回は、参加者約30人が、カラマツの苗木330本を植えました。青年部長の西館純之さんと女性部長の村上裕子さんは声をそろえて「森林の再生にはまだまだ力が必要ですね。これからも皆さんと力を合わせて頑張っていきたい」と話しました。



植樹を終えて記念撮影するメンバーたち

東京2020オリンピック・パラリンピック聖火リレーを記念した植樹会が5月15日、町スポーツセンターの敷地内で行われ、幼児や児童など約20人がエゾヤマザクラの苗木10本を植えました。

記念植樹は、公益財団法人日本さくらの会が進めているプロジェクトで、道内では厚真町のみで行われました。

植樹には、子どもたちのほか、国会議員や町議会議長、町商工会、とまこまい広域農協から来賓も出席。宮坂町長が「世代を越えて、明るい厚真町をバトンタッチしたい」とあいさつしました。参加者は、2人1組になって苗木に土をかぶせて水をかけ、苗木の成長を願いました。

東京 2020 聖火リレー記念 桜の苗木を植樹



丁寧に土をかぶせる女の子と町長

吉野地区に寄贈されたシロヤマザクラの苗を植樹

胆振東部地震で甚大な被害があった吉野地区で5月15日、奈良県・吉野山から贈られたシロヤマザクラの植樹会を開き、遺族など13人が鎮魂と復興の願いを込めて苗木5本を植えました。

苗木は、公益財団法人吉野山保勝会が町の復興を応援する目的で読売新聞社北海道支社を通じて寄贈したもので、地震の翌春に町に届き、桜丘の植林地に仮植えして大切に育ててきました。シロヤマザクラは、数に限りがあり大変貴重なものですが、吉野地区の名前の由来を聞いた同会が、特別に協力を申し出てくれました。参加者は、斜面に向かって黙とうをささげた後、かつての桜の風景を心に重ねながら苗を植えました。



鎮魂と復興を願って植樹する参加者たち